日本キリスト教会　広島長東教会だより

ミニバラ No.19

〒731-0135　広島市安佐南区長東 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2008 年 1 月発行

善にさとく、悪にはうとく

「あなたがたの従順は皆に知られています。だから、わたしはあなたがたのことを喜んでいます。なおその上、善にさとく、悪には疎くあることを望みます。平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう。」

（ローマの信徒への手紙 16 章 19~20 節）

信仰とは、神に対する従順のことです。ローマ教会が、神に対する従順に於いて、世界の教会に知れ渡っていたと言うことは、如何に彼らが、素直な良い信仰をもっていたか、と言うことを証明しているのですが、パウロには、その素直さがチョッと心配なのです。何故なら、素直である、従順である、と言うことは、また騙され易い、と言う欠点も同時に持つからです。

主イエスも、弟子たちを伝道に遣わされるに当たって、こう忠告されました。「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群に羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10:16）と。素直だけでは、童話に出てくる赤頭巾ちゃんのように、直ぐに狼に食われてしまいます。だから、これは本当に信じるに足るものなのか否か、的確に識別し、間違いなく判断の出来る、蛇のような賢さを持つことが求められるのです。

パウロも、この主イエスのお言葉を彷彿とさせるように、「善にさとく、悪には疎くあることを望みます」、と訴えます。しかし此処でパウロは、「素直だけでは駄目だ、悪智恵も身につけねば」、とは言わずに、「悪には疎くあれ」、と言うのです。それでは、いよいよ狼の思う壺になるのではないか、と私たちはいささか心配になるのですが、一体パウロの真意は何処にあったのでしょうか。

主イエスが誕生されたとき、東の国から三人の博士たちが訪ねて来ました。ユダヤ人の王の誕生ですから、彼らはてっきり、その場所はエルサレム、それもヘロデの王宮であろうと考え、先ず、ヘロデを訪ねました。勿論そんな所に、救い主がお生まれになるわけがありません。彼らは次に、律法学者が告げたベツレヘムを目指すのですが、この時ヘロデは、自分も拝みに行きたいから、帰りには又必ず立ち寄って、見たことを伝えてくれ、と彼らに強く懇望しました。ヘロデは、この時既に、幼子イエスを殺そうと考えていたのですから、もし彼らが、ヘロデの言葉を真に受けて、エルサレムに立ち寄っていたら、それこそ大変なことになっていました。しかし彼らは、エルサレムに立ち寄ることなく、「別の道を通って自分たちの国に帰って行った」（マタイ 2：12）と言います。彼らに、こう言う判断が出来たのはどうしてでしょうか。それは、彼らが悪智恵を身につけていて、ヘロデの悪巧みを見抜けたからではありません。夢のお告げ、つまり神の言葉に聞き従ったからだったのです。本当に狼から身を守る術は、悪智恵ではなく、神の言葉に従う、これ以外にはないのです。それをパウロは、「悪には疎く」、と言ったのです。

すべての欺きの背後には、サタンが働いています。「魔が差す」、と言う言葉がありますが、この“魔”とは、即ち悪魔、サタンのことなのです。どんなに用心をしていても、誰にだって、「魔が差す」、と言うことは起こり得るのです。だから恐いのです。

でもパウロは言います。「平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう」、と。既にキリストは、十字架と復活を通してサタンに勝利されました。しかし、中々敗北を認めようとしないサタンは、今尚盛んに抗って、神の子らを惑わすのですが、それも間もなく終り、完全にサタンが打ち砕かれる時は来るのです。だから、サタンとの戦いを宿命のように思って、最早勝利を諦め、投げ出すことのないように、最後は必ず勝利が待っているのだから、希望を持って戦い抜くように、とパウロは、勧め、また励ますのです。

牧師　三輪恭嗣

（2007 年 12 月 16 日主日礼拝説教より）